

重んじる孝行心に発展して行くのだと主張した。

崔来沃は韓国における風水地理説の概要にまず触れてから説話の中にある風水概念を抽出し、その受容意識について追求した。つまり韓国の風水説話には韓国人の幸福観、報償心理、人間性の表出と信仰心が含まれ、説話には風水の理論とは異なる人間的側面を興味深く、なお教訓的に示していることを論証した。

曹喜雄はトリックスターの語意から論じはじめた。古典からその事例をあげ、かつて多く普及されたことを指摘した。トリックスターは李朝末期の他の文学ジャンルにも多くの影響を与え、たとえば裨神将伝に登場する房子と愛娘からも、仮面劇に登場するマルトウキからもその要素がうかがえると主張した。

筆者の発表、トケビ溯源考は樹木信仰と妖怪の関連を中国と日本と対比させ、韓国のトケビは複合文化の要素が濃く、その重層性を究明することによって、まことのトケビ性格を知ることができると言う。とくにトケビの本体が木で出来た道具か、あるいは森や山奥と関連が深い点に注目し、このような視覚から研究する必要性を強調した。

以上、詳しく触れる余裕がないので大ざっぱに発表者ごと一言ずつコメントを加えただけで読者には大変申し訳ないと思う。この催しを企画した主催側の一人として強く感じたのは、説話が人間の心意を現わす口承文芸であるゆえにその伝播性も強く、お互いの比較研究がどの分野よりも必要であるということである。

(チェ・インハク／仁荷大学校文科大学)

シンポジウム

「カレワラと世界の叙事詩」

大林 太良

フィンランドのエリアス・リョンロットがカレワラの旧版(いわゆる『古カレワラ』)を完成し、その序文につけた日付は、一八三五年二月二十八日であった。その一五〇周年を記念して、フィンランドでは、さまざまな行事が行なわれた。その一つが、トゥルク市において二月二十二日から二十六日まで開催された国際シンポジウム「カレワラと世界の叙事詩」であって、トゥルク大学と北欧民間伝承研究所(Nordic Institute of Folklore)の主催で、組織委員会の委員長はトゥルク大学、および同研究所のラウリ・ホンコ教授だった。

このシンポジウムには世界各地から三十人の発表者によって報告が行なわれた。日本からは大林が出席した。このシンポジウム終了後、ヘルシンキのフィンランドディア・ホールにおいて二十八日にフィンランド政府主催のカレワラ一五〇年祭式典が催され、日本からは大阪外大の小泉保教授と大林が列席した。

さて、シンポジウムに話をもどすと、この標題にふさわしく、世界のさまざまな叙事詩がとり上げられた。カレワラ自体についての

報告が多かったのは当然であるが、古くはホメーロス、ウエルゲリウス、さらにエツダ、ベオウルフ、ニーベルンゲンリートのようなヨーロッパの古代や中世の叙事詩についての発表のほか、スコットランドのマクファーソンのオシアン、プロヴァンスのミストラのミレイユのような近代の例についての報告もあった。ヨーロッパ以外では、イランの『王書』、インドのマハーラタ、ラダックのゲセル叙事詩についての報告、モンゴルの叙事詩とカレワラにおけるモチーフの比較、中国における叙事詩採集状況の紹介、またアフリカにおける叙事詩についての報告もあった。私はアイヌのユーカラの歴史的背景について報告した。

これらの報告を通じて、あらわれた論点のいくつかに次のようなものがあった。まずカレワラに関しては、これはリヨンロットがプロットをつくり、民間の叙事詩を材料として構成したものであり、そのモデルとしては、ホメロスなどのヨーロッパの古典的叙事詩が利用されたこと、カレワラの出版がフィンランド人のアイデンティティー形成ばかりでなく、ヨーロッパの諸民族、ことに小民族に大きな刺激を与えたことである。

また叙事詩一般については、文学の利用と口承との関係が極めて複雑であること、また語り手の役割も、文化によってさまざまであることが、しばしば論ぜられた。パーリーやロードの調査で有名な、ユーゴスラヴィアの叙事詩の語り手は、話の大筋はまもっているが、あとに決り文句 formulas を駆使して、一回ごとに細部においては異なる内容を演ずるが、これに反してフィン系の呪文を中心とした叙事詩では、忠実な伝承が重要である（オイナス教授）。これ

などは、アイヌのユーカラの語り手と伝承を考える場合に注意すべき論点であろう。

またフランスのセイドゥー女史は、アフリカの叙事詩を論じて、神話的志向をもつ叙事詩と歴史的志向をもつ叙事詩が区別でき、前者は、中央集権を欠く社会に特徴的であり、後者は中央集権をもち社会的成層のある社会に特徴的であるという。これなどは、世界の他の地域についても同じことが言えるかどうか、検証してみるに足る興味深い説である。

今回のシンポジウムでは、また一般に叙事詩の研究においては、文学史的関心が主流をなしているために、特定地域の叙事詩と社会的背景との関係の分析は、このセイドゥーの発表や、私のユーカラ論など少数に過ぎなかったが、今後は、この分野の研究がもっと必要ではないかと思われた。

なお、本シンポジウムで発表された諸論文は、いずれ書物の形にまとめられるはずであるが、出版社その他の予定については、まだ明らかになっていない。

最後に一言。このシンポジウムに出席して、私が強く感じたことは、日本の口承文芸学界では叙事詩の研究が不活発なために、世界のこの分野での研究についての情報が著しく不足していることであった。我が学界は昔話研究などに関しては、世界の学界の動向について、かなり情報が入っているが、叙事詩についてはそうでないのである。会期中に、インディアナ大学のオイナス教授が、自ら編集した世界の叙事詩の概観を恵贈されたが、同書やハットーの編集した概観^①によって、近年の国際学界の動向はある程度うかがうことは

べきよう。しかし、私も、このような概観が存在するのを知ったのは、このシンポジウムに出席してからであった。海外における叙事詩研究の動向についての紹介の仕事が必要だと痛感した。

【註】

- (1) Felix J. Oinas (ed.), *Heroic Epics and Saga: An Introduction to the World's Great Folk Epics*. Bloomington: Indiana University Press, 1978.
- (2) A. T. Hatto (ed.), *The Traditions of Heroic and Epic Poetry*. Vol. 1: *The Traditions*. London: The Modern Humanities Research Association, 1980.

日本におけるカレワラ一五〇年祭 行事全体をみわたして

高橋 静男

カレワラ⁽¹⁾は、フィンランドにおいて、民族意識高揚を主たる目的として、カリヤラ⁽²⁾地方の伝承詩を主素材にして、一八三五年にE・ロンルート⁽³⁾によって体系化された長編の民族叙事詩である。その意図は生かされ、当時ロシア治下にあったフィンランド人の民族的ア

イデンティティの確立に大きな役割を果たした。それは、他民族において国家秩序の保全に神話が果たした役割に酷似している。実際のところ、カレワラにも、神話の本質や、神話の本質的機能がみとめられる。

一般に、神話と国家(社会)との有機的な関係は、かように人間という現象を規制する。それゆえに、神話を核とする習俗・歴史を総称して伝統と呼び、自由を求めた多くの詩人・哲学者・作家・研究者たちは、それを自己の問題として格闘してきた。若いゲーテはそれに反抗した⁽⁴⁾。大岡昇平氏は歴史の現実を冷徹に現代と未来に提示し⁽⁵⁾、伝統は個人に内在し、それを意識化しないことに意義がある⁽⁶⁾と理解しているようにみうけられる。

ところが、フィンランド政府は、今年、カレワラ一五〇周年にあたり、国内外において約四〇〇にのぼるカレワラに関する行事にテコ入れしているのである。本学会も後援団体の一つである日本カレワラ一五〇年祭もその一環であった。文部次官J・ヌンミネン⁽⁷⁾氏を代表とする「カレワラ一五〇周年祭実行委員会」を組織し、カレワラ関係行事に経済的助成をしたり、カレワラの普及に貢献した内外の人々を金銀銅のメダルをもって褒賞までしている。

フィンランドにおけるこの社会現象を単純に外側からみれば、伝統の強化と映る恐れがある。日本でいえば、国家的規模で「記紀」に関する行事を実施するのと同じようにささみえるかもしれない。しかし、フィンランドにおいては、それは、社会的現象としても、質的な意味においてもまったく異なっている。学問と芸術と人類協調の精神の振興に直結しているのである。しかし、カレワラ刊行か

らここに至るまでの道のりは苦渋に満ちたものであった。その過程は、以下に報告する日本カレワラ祭の概要によって明らかとなるであろう。

日本カレワラ祭は末尾に掲げる日程表で明らかなるように、四日間をわたって多彩に行われた。ここでは、その柱ともいえるべき講演三題とシンポジウムについて、その概要を伝えておきたい。なお、講演は時間の関係で会場によって内容に多少の長短があった。しかし、同一のテキストの一部削除によるもので趣旨において変りはなかった。また、講演(1)(2)は、関西で唯一の引受校であった関西外国語大学で筆者が聴講したところによる。

報告に入る前に、カレワラはその編纂過程が明らかにされており、編纂に使用された採集資料のほとんどが記録として残されている点で稀有な叙事詩であり、理解の一助にもなると思われるので「カレワラ生成過程図」を掲げておきたい。

(概 要)

講演(1)「カレワラの解釈——歴史的か神話的か」

発表者 トゥルク大学教授 L・ホンコ (Lauri Honko)

通訳 高橋静男 (国際児童文学館)

(1)一八三五年「古カレヴァアラ」刊行後、カレワラの解釈をめぐる、フィンランド古代の歴史とする立場と、神話とする立場からの論争が交叉した。その原因として、ロンルート自身が当時の文化政策者の編纂目的を考慮して歴史的解釈を試みたこと、神話観と歴史観が

今日のように明確でなく研究法が確立していなかったこと、K・クローンの「地理歴史学的口承文芸研究法」による近代的な比較研究が誕生し、カレワラから外来要素が発見され始めたが、当時の、民族のアイデンティティを確立していかなければならない歴史的事情により、正当な評価がなされなかったことなどがあげられる。結局、歴史的解釈が支配的となつて第二次大戦を迎えるに至つた。民族的要請の前に学問の自由が制限され、純粋に学術論争にならなかつたことに根本的な原因があると、ホンコ氏がみていることは、次の言葉に表われている。

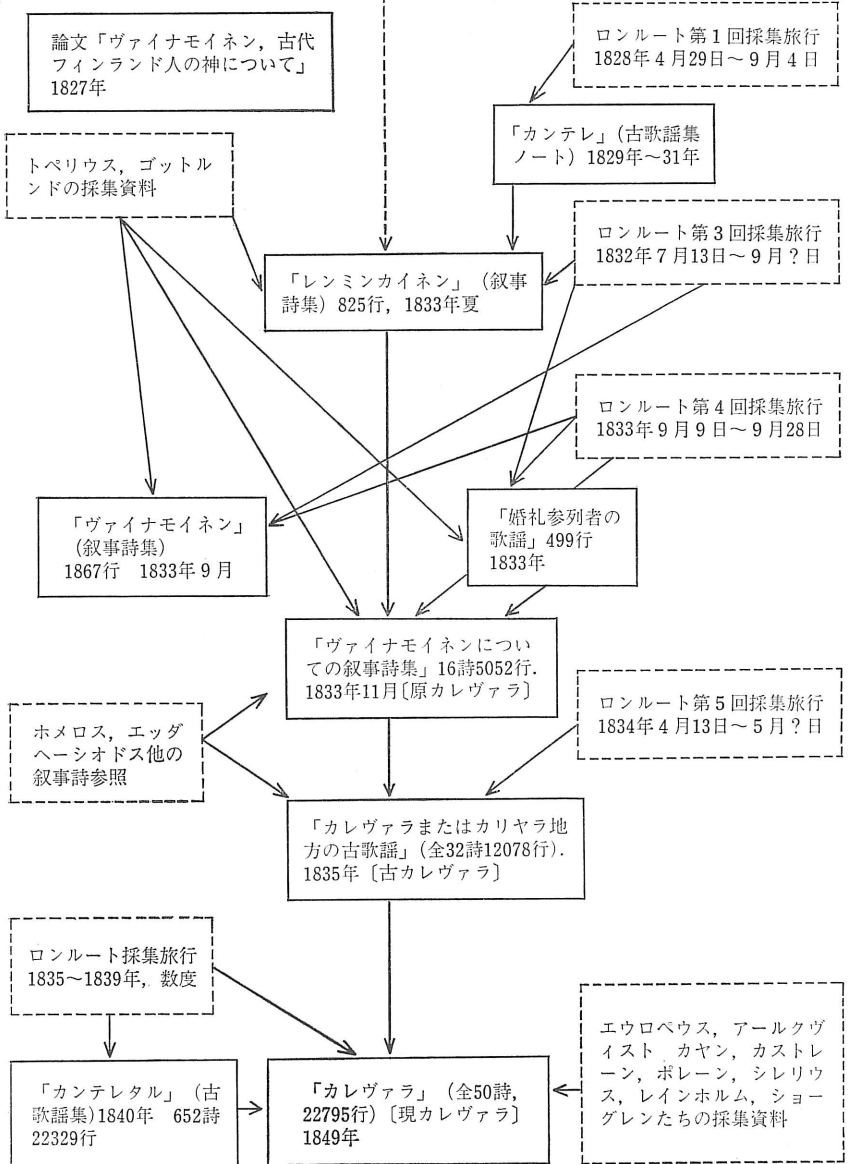
「民族的アイデンティティ危機下において、口承文芸の歴史的解釈と神話的解釈との消長をみると、民族的アイデンティティを強調する必要から、つねに、歴史的解釈の方へ逃避していくようです。」

(2)戦後、研究の自由が確立し、地理歴史的方法つまりフィンランド学派の進展に伴い、カレワラや伝承資料の中から外来要素の発見が相次ぎ、カレワラの歴史的解釈は崩れ始めた。

(3)ロンルートはカレワラ編纂に際し伝承資料を尊重するように務めた。しかし、同時に、彼は、自身の古代的感受や幻想によって詩句や詩群を分解したし、文化的資料によって伝承詩のモデルを求める姿勢を欠いたために、カレワラは、その民族誌学的資料としての価値を失なった。

(4)しかし、カレワラに含まれる神話群は、ロンルートによる一つのバリエーションであり、他の伝承者によるバリエーションと同様に、それらを通じて神話の基本的構造を求める試みは可能である。

「ヴァイナモイネン主人公の伝承詩集」
1820年 R. V. Becker著.



〔カレヴェアラ生成過程図〕

- 実線枠内はロンルートの著作
- 点線枠内は資料源
- 部分的に高橋が加筆削除した

(5) カレワラは、詩人としてのロンルートによる天才的統合であるため、その素材をフォークロア研究の資料として扱うことができない。民族誌学的検証を必要とする。

(6) 伝統の伝達と同様に、我々は神話をそのまま受けとめるだけでなく、神話を再生し、創造し、そして避けることができないし、神話は我々の周囲に満ちている。カレワラもその一つであり、口承文芸が含まれる神話も同じである。歴史的解釈はいわゆる「大いなる時代」の存在を前提とし、マルキスト的解釈は前封建的な無産階級社会像を求めるが、どちらの解釈もその行く手はみじめな状況に向うであろう。「大いなる時代」の社会は消滅してしまっているからだ。口承文芸研究にとって大切なことは口承文芸をありのままの形で肯定することではないか。そこに伝統は脈々と続き、古代社会生活のメッセージが伝えられていることを容認すべきである。それを民族誌学的に検証していくことによって、そこに十分な情報があれば、我々を文化や言語の壁を越えてかり立てるであろう。

講演(2)「文学的芸術作品としてのカレワラ」

発表者 ヘルシンキ大学教授 K・ライティネン (Kai Laiinen)
通訳 庄司博史 (国立民族学博物館)

伝承資料から文学作品に昇華されていく過程を論究した。

(1) ロンルートは、先学者の影響を受けて、ホメロス、オシアン、ニールンゲン、ヘーシオドス、エッダを視野に入れて、ヴァイナモイネン⁽¹⁾を中心とする叙事詩編纂の構想を立てた。

(2) そのために必要な原資料の収集には徹底を期した。長期間にわた

る採集調査旅行を幾度も実施し、先学や同時代人による採集資料のほとんどすべてを参考にした。

(3) しかし、表現者としての彼は「民詩の再現者ではなく詩人の態度」でのぞみ、「美の原理を伝統の原理に優先させた。」

(4) 西フィン語を中心にし、民詩採集地である東フィン語方言やカリヤラ語から新語を取り入れる形で、全体にわたって言語統一を図った。

(5) 登場人物の性格に統一性を持たせ、かつ、各人物像に二分的側面を持たせた。人間存在に対する同様の視点は、文学・哲学において、洋の東西に見られる傾向である。

(6) 人物描写に、西欧の叙事詩や英雄と共通部分が見られる。ドン・ファン、オルフェウス、オイディプスが例としてあげられる。その他、聖書やキリスト教的神話との近似もみられる。

(7) 古典言語学を学んだロンルートは、アリストテレスの詩学が要求するドラマ理論の影響を受けて、カレワラの七つの主要部分を構成した。

(8) これらによって、カレワラは、非暴力・平和・人間尊重、勝ち戦^{いくま}として失なうものの方が多いこと・民主的平和的文化思想の勝利・芸術と喜びなどを描き、そこに民族の躍進と発展をみるというテーマがこめられることとなった。

(9) ロンルートの期待に込めるかのように、カレワラに刺激を受けて、作家キヴィ、レイノ、ハーヴィッコ、画家ガツレン・カツレラ、建築家サーリネン、作曲家シベリウスなどが、フィンランドと世界の文化に影響を与えた。

講演(3)「カレワラの言葉とリズムについて」

発表者 作家V・メリ (Veijo Meri)

通訳 荻島崇(東海大学)

ヴェイヨ・メリ氏の講演の題は「無慈悲なポホヨラの美女と求婚者たち」で、前半はカレワラのストーリーが紹介された。後半はメリ氏の想像によるカレワラのできごとが紹介された。例えば奴隸クツレルヴォに対する意地悪な女主人を、今までの解釈とは逆に、叶わぬ思いを表現しようとする女性としてとらえていた。(荻島崇氏の要約による。但し、日時・場所に関する記述は筆者が割合した。次項も同じ。)

シンポジウム「叙事詩の世界」

大林太良教授を司会者にシンポジウムが開かれた。ラウリ・ホンコ教授は、数ある民間叙事詩の中でも、カレワラは原典が残っており、作られた過程が知られているという意味で特殊である、と述べられた。田中克彦教授は、ブリアート、ヤクトなど文字を持たない民族の言語と文学はカレワラをモデルにしていると指摘された。

吉田敦彦教授からは、カレワラ中のイルマリネンとサンポの話の中に、ユーラシア大陸の西から東まで広がる、印欧語民族を仲介とした説話との類似点を見出すことができるとの発表があった。

(注) 講演(3)とシンポジウムについての要旨を二、三百字でまとめ、ほしいという筆者の頼みを荻島氏が快く引受けて下さったもので、全体に短かい要旨になったのは、筆者の責に帰する。)

以上のほかに、日程表にもあるように、コンサートその他の催物も開催されたが、ここではその解説を割愛する。

フィンランド人にとって、カレワラ祭は、ヒューマニズム、学問の自由、芸術、国際的協調精神などを高揚する場となった。とくに、フィンランド人の伝統意識の核心部分を形成したカレワラ中の神話が純粹に科学的研究の対象とされ、民族性を強調した学問を克服していったフィンランドの口承文芸研究史の軌跡が印象に残った。

このようなカレワラ祭が、政府の肝入りで行われたところに、現代フィンランド人の誇りをみる思いがする。

なお、関西会場となった関西外国語大学は、カレワラ祭の開催に大学を挙げてご尽力なされました。通訳として参加したひとりとして心よりお礼申し上げます。

【註】

(1) 原語は KALEVALA で、日本語での表記にはカレワラ、カレヴァラ、カレバラの三種がみられ、筆者は他の機会ではカレヴァラを使用している。

(2) 原語は KARIAALA で、日本語での表記は、カリヤラ、カルヤラ、そして英名に準拠したカレリヤの三種用いられている。ほほ、現在のソ芬国境線をはさむ地域名であった。

(3) Elias Lönnrot この表記も日本では、リョンロット、リョンロート、ロンロット、レンロットなどがある。

(4) 『若きヴェルテルの悩み』

(5) 『レイテ戦記』ほか。

(6) 日本の作家として初めてフィンランドに招待された折、ユネスコ主催の講演会での講演「伝統と現代」。

(7) Jaakko Numminen

(8) Väinö Kaukonen 著“Lönrot ja Kalevala” P. 161

(9) 初版は一九〇八年芬語で刊行された。一九一一年独語訳。一九二六年加筆増補版が英独仏語で出版され世界に広まった。邦訳『民俗学方法論』（岩波書店）。

(10) Väinämöinen 日本語表記には、ワイナミョイネン、ワイナモイネン、ヴァイナモイネンなどがある。

* * *

日本カレワラ一五〇年祭行事日程

(A) 東京会場

10月21日(月) 13時30分—17時30分

記念講演会(東海大学校友会館)

・挨拶 ヤーッコ・ヌンミネン(フィンランド文部次官)

・カレワラ紹介 小泉保(大阪外国語大学教授)

・講演 「カレワラの解釈——歴史のか神話的か」 ラウリ・

ホンコ(トゥルク大学教授)

・講演 「文学的芸術作品としてのカレワラ」 カイ・ライテ

イネン(ヘルシンキ大学教授)

10月21日(月) 19時—21時

記念コンサート(パリオホール)

・テーマ 「カレワラ・ロマン主義とフィンランドのピアノ音

楽」ピアニスト・館野泉

10月22日(火) 13時30分—17時30分

記念講演会(東海大学校友会館)

・講演 「カレワラの言葉とリズムについて」 ベイヨ・メリ

(作家)

・カンテレ演奏 演奏家・菊川由紀

・シンポジウム「叙事詩の世界」

司 会 大林太良(東京大学教授)

パネリスト ラウリ・ホンコ(トゥルク大学教授)

田中克彦(一橋大学教授)

吉田敦彦(学習院大学教授)

・挨拶 松前達郎(東海大学副総長)

〈展示会〉(東海大学校友会館)

10月21日12時30分—18時、10月22日12時30分—17時30分

・カレワラのパネル ・カレワラに関する図書

(B) 平塚会場

10月23日(水) 15時—16時30分

記念講演(東海大学松前記念館)

・挨拶 斉藤博(東海大学文学部長)

・講演 「カレワラの言葉とリズムについて」 ベイヨ・メリ

(作家)

(たかはし・しずお／勲大阪国際児童文学館)

(C) 名古屋会場

10月23日(水) 13時30分—17時30分

記念講演会(名古屋国際センター第一会議室)

・挨拶 ヤーッコ・ヌンミネン(フィンランド文部次官)

・カレワラ紹介 小泉保(大阪外国語大学教授)

・講演 「カレワラの解釈——歴史のか神話のか」 ラウリ・ホ

ンコ(トゥルク大学教授)

・講演 「文学的芸術作品としてのカレワラ」 カイ・ライティ

ネン(ヘルシンキ大学教授)

・挨拶 牧島久雄(なごや国際交流団体協議会副会長)

(D) 関西会場

10月25日(金) 15時—17時30分

記念講演会(関西外国語大学多目的ホール)

・挨拶 ヤーッコ・ヌンミネン(フィンランド文部次官)

・カレワラ紹介 小泉保(大阪外国語大学教授)

・講演 「カレワラの解釈——歴史のか神話のか」 ラウリ・ホ

ンコ(トゥルク大学教授)

・講演 「文学的芸術作品としてのカレワラ」 カイ・ライティ

イネン(ヘルシンキ大学教授)

・挨拶 谷本貞人(関西外国語大学学長)